都高P

第９次

2017年 7月22日（土）～23日（日）

高校生東北被災地 視察ツアー

1日目⇒南相馬市視察　宿泊先⇒農家民宿いちばん星　2日目⇒小高産業技術高校との交流会

都高P連では、平成25年度から「都立高校生に被災地の実情を直接、見て、感じて、考えてもらう」ことを趣旨にツアーを実施してきました。今年は“福島県の今”にスポットを当て南相馬市の視察ツアーに31名の高校生が参加しました。

帰宅困難区域

車窓から見た町並み

「東北被災地視察ツアーに参加して」

東村山西高等学校 ２年 村田 浩晟（コウセイ）

私が初めて東北の被災地に訪れたのは小学校六年生の秋でした。
両親は阪神淡路大震災を経験していたこともあり、私を連れて南三陸、陸前高田、そして宮城の大川小学校へと献花と涙を添える二泊三日の被災地訪問でした。
当時の南相馬は放射能汚染の問題で規制線が張られ、足を踏み入れることが出来きなかったので、あの日、両親と言葉なく見た被災地の景色に人は戻っているのか、家は建っているのか、探し人は見つかったのか、そんな思いに駆り立てられ今回のツアーに心友を誘い３人で申し込みました。

ツアーの初日、原発付近をバスの車窓から眺めることができました。
そこには合羽のようなものに包まれた人が二人立っており、車内では「放射線が高いので降りることはできません」とアナウンスが流れ、私たちは車窓から町並みを眺めることとなったが、その町は手つかずのゴーストタウンでした。
私の情報不足だったこと否めないが、634Mの電波塔が建ち、オリンピックも控えたこの日本で震災から６年も経った今も手つかずに放置された町が存在するということに愕然とし、それと同時にこの町の人達は今どこで何をしているのだろうか…と思った。
のっけからノックダウンを受けた私は、「しっかり見てきなさい」と言っていた両親の言葉を必死に思い出し記録のために写真を撮らねばとは思ったが、どうしても写真を撮ることが出来なかった。

バスはこの後、南相馬市防災センターに向かった。
そこには９Mの津波の到達地点とこの津波で飲み込まれた町の惨状が記録されていた。
９Mといえばビルの３階くらいの高さである。
そんな津波が突然自分の目の前に現れ、その津波から逃れようとして逃げた先には目に見えない放射線がある。
一体、町の人はどこに逃げたらいいのか…どこに逃げ道があるというのだろうか…。
そんな思いのまま、この日の夜、お世話になる民宿のおじさんの話を聞くこととなった。

民宿のおじさんは偶然にも大きな被害に遭うことなく済んだことで、近隣の体育館に避難している方達のボランティア活動を２年され、その体験から本当の復興とは何かを考え、この民宿を開店されたそうだ。
翌朝、私たちは小高産業技術高等学校の生徒たちとの交流会に向かった。
そこでは実際に震災を経験した同世代の生の声を聞くことができました。
中でも最も印象強く残っているのは、震災直後、友達や家族を心配して家に戻って亡くなった人が沢山いる。だから自分の命を一番大切に考え行動すること。
逃げる時は落下物から頭を守り、津波に飲まれないように高台に逃げる。
そして生きて家族と会えるようにあらかじめ避難場所を決めておくこと。
でも、そう言いながら幾度となくあった余震に感覚が慣れてしまい、震度４の揺れでは動じなくなってしまった。と少し笑みを浮かべて話す顔に何とも言えない気持ちになりました。
また、彼らの友達の中では避難したまま戻ってこない子も数人おり、友達がどれだけ大切であるかを同世代としてその思いを感じ入りました。
実際、私は父の仕事の関係で８回もの転校を経験しているからこそ、友達を作る難しさやその友達を大切にすることの意味を強く思います。
今回、こうして心友３人とこのツアーに参加出来たことは、あの被災から６年余りたった東北の復興とともに生涯忘れることはないだろう。
今思うことは、ツアー初日に見たゴーストタウンと化した町並みのこと。
あの町にも以前は人が住み、暮らしがあり、そして私と同世代の若者の姿があっただろう。
地震と津波、そして放射線という目に見えない脅威から逃れた方々の今の暮らしがどうか心穏やかであるように祈るばかりです。

最後に今回このツアーを企画して下さった都高Pの方々並びに私達の参加を支援して下さった村西高の保護者の方々、ありがとうございます。
そして一緒にツアーに参加した心友や同世代の仲間や小高の仲間たち、世話をしてくれた方々ありがとうございました。
私はこのツアーで見た・感じた全てのことを被災当事者ではありませんが「語りべ」として語り継ぎ、本当の復興がなんであるかを今一度考え、日々の生活を大切に丁寧に生きていきたいと思います。

皆さま、貴重な体験をさせて頂き本当にありがとうございました。

フレコンパックの山 ①

各所に設置されている線量計

フレコンパックの山 ②

農家民宿 いちばん星

小高産業技術高校校舎の一部

小高産業技術高校の生徒さん

生徒交流風景

再び 南相馬を訪れて

東村山西高校PTA会長　後藤浩子

昨年に引き続き、東北被災地視察ツアーに参加した。
津波による被害だけの地域と違い、原発が近い南相馬はまだまだ復興してきたとは言えない様子が見て取れる。
徒歩、自転車、バイクはまだ走行禁止。窓を閉めた車だけが通行出来る道路。
車窓に流れるのは6年前のあの日から時間が止まったままの町。
瓦の落ちた屋根。割れた窓ガラス。自動ドアが開いたまま、品物もそのままにツタに覆われたコンビニ。乗り捨てられ、錆びついた自動車。除染によって集められたフレコンパックの黒い山。
ツアーに参加した生徒達も視線をそらすことなく見つめていた。

今回参加した生徒達が帰途の車中でツアーの感想を述べる中で多かったのが、自分の見たこと、感じたことを伝えていきたいというものだった。
小高産業技術高校との交流の中で、楽しむ趣味があり、勉強、部活に取り組んでいるなど、自分達と変わらぬ日常があることを知った反面、震災に対しての想いや心構えを聞いて心に刻まれる何かを得たのだろう。

「もし、震災が起きたら、自分を一番大事にして行動してください。自分を一番大切に思って行動してください。避難したら戻らないでください。心配して戻って帰ってこない人がたくさんいたから…」

当時、小学生だった少女が高校生になって同じ高校生に伝えてくれた言葉。
間違いなく深く皆の心に届きましたよ。
忘れないこと、そして見たまま、感じたままを伝え続けることを強く思い直したツアーだった。

【高校校生東北被災地ツアー】感想

松が谷高校 PTA会長 大久保 弘美

７月２２日(土)～７月２３日(日)に東京都の高校生３１名と共に東北被災地に行ってきました。東日本大震災から６年経った現在の状況がどのようになっているのか、自分の目で見て感じて、さらに高校生がどう感じ、どう思うのか、一緒に時間を共有してきました。
行きのバスの中で生徒全員にこのツアーに参加した理由を聞いてみました。友達と一緒に来た。親に行くように言われた。夏休み家族旅行に行けないから申し込んだ等あまり前向きな理由でない生徒もいれば、東北の現状を知りたい。という理由で参加した生徒等、様々でした。
福島県に入り、まず双葉郡の大熊町、双葉町、浪江町を車窓から見学しました。双葉郡はいまだ避難区域になっており、屋外に出ることは禁じられている為、バスの中から見る景色でしたが、人の気配は無く、静けさの中に不気味な感覚がなんとも言えない光景でした。田んぼだった場所が、６年間で雑草が延び、人けの無い建物には草木が一面に覆われ、遠くの方を見渡すと汚染された土壌が入っているフレコンパックが大量に積まれ、メイン道路以外は通行禁止、他の道路に侵入出来ない様にバリケードが設置されてました。

２日目は、小高産業技術高校の見学及び生徒と交流をしました。今年の４月に２つの高校が合併し、建替えましたが震災当時は避難場所になっていたそうです。生徒同士の交流、また保護者、先生との交流を深め、有意義な時間を過ごしました。帰りのバスの中で生徒全員に感想を聞くと全員が来てよかった。良い経験が出来た。と感想を言ってました。またお互いの交流も深まり、何より素晴らしい財産になった事と思います。震災から６年経ちましたが福島の方々の心の優しさと、前を向いてがんばっている姿に感激しました。一緒に行った生徒も何かを感じ将来この経験がきっと役に立つことと思います。